

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26885099

研究課題名(和文)スタジオ間共同製作からみた現代中国映画産業：ネットワーク分析からのアプローチ

研究課題名(英文)Studio Co-productions in the Contemporary Chinese Film Industry: A Network-Analysis Approach

研究代表者

中嶋 聖雄(Nakajima, Seio)

早稲田大学・アジア太平洋研究科・准教授

研究者番号：70734325

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：過去35年間(1979～2013年)に生産された中国映画についての生産データ どのスタジオが単独あるいは共同で映画を製作したか に関するデータベースを作成し、ネットワーク分析の方法を用いることによって、スタジオ共同製作のネットワーク構造の変化・不変化を明らかにすることをめざした。パイロット分析の結果、経済社会学的アプローチが予測するような、「繰り返し共同」のかたちをとった市場の「社会的構造化」 社会的権力(例えば、国有スタジオに対する政策上の優遇)や過去の取引の惰性的継続のような社会構造の存在 を示唆する結果が得られた。

研究成果の概要(英文)：I have attempted to construct a network database of production organizations (film studios/production companies) for all films produced (or co-produced) in China using the data available in the China Film Yearbook (1979-2013). I was able to construct a longitudinal dataset (for both "panel structure" and "event structure"). I first utilized the method of "network analysis" to construct various network variables (e.g., density, closeness, and centrality) from the relationships among production organizations. Then I investigated the evolution of these relationships using the method of longitudinal data analysis, particularly "event history analysis" and "panel data analysis." Although the analysis of the constructed dataset is still at the early stage of development, I generally found a significant number of repeat collaborations, which buttresses the hypothesis of the "social structuration" of markets as actors mitigate uncertainty inherent in various exchanges.

研究分野：経済社会学

キーワード：中国 映画産業 共同製作 ネットワーク ネットワーク分析 経済社会学 組織社会学 文化社会学

1. 研究開始当初の背景

第73回アカデミー賞にて、外国語映画賞など四部門を受賞した『グリーン・デスティニー』(李安監督; 2000年; 台湾・香港・アメリカ・中国共同製作)あるいはまた、米国での公開第一週に全米興行成績第一位となった『HERO』(張芸謀監督; 2002年; 香港・中国共同製作)のような映画作品に代表されるように、中国映画産業は、世界の映画市場において、その役割を急速に拡大させてつある。日本を含め諸外国における中国映画の興行的成功にともない、現代中国映画に関する学術的研究は増加している。しかし、先行研究のほとんどすべてが人文・映画論的アプローチによるテキスト分析であり、産業研究に関しては、質的データ・二次資料を用いた産業史的研究はいくつか存在するが(例えば、申請者の研究、Nakajima 2007; Nakajima 2009; Zhu and Nakajima 2010など)、信頼性の高い計量的データを用いた分析は皆無に等しかった。

2. 研究の目的

本研究は、過去35年間に生産された中国映画についての生産データ どのスタジオが単独あるいは共同で映画を製作したか に関するデータベースを作成し、ネットワーク分析の方法を用いることによって、スタジオ共同製作のネットワーク構造の変化・不変化を明らかにすることをめざした。「新古典派経済学」によれば、現代中国におけるような市場移行期の生産ネットワークは、匿名の生産アクターによる一回性の「非繰り返し共同」(non-repeat collaboration)に向かうとされる。しかし、経済社会学的アプローチは、市場経済における生産ネットワークも、社会的権力(例えば、国有スタジオに対する政策上の優遇)や過去の取引の惰性的継続のような社会構造・メカニズムに「埋め込まれており」、「繰り返し共同」のかたちをとった市場の「社会的構造化」が出現するものとみる。本研究は、上記二つの仮説(新古典派経済学と経済社会学)の検証を行った。

3. 研究の方法

- 以下、四段階のステップを経ることによって、研究目的の達成をめざした。

ステップ1) 計量的ネットワーク・データベースの作成。適宜、データベース作成途中のデータを用いて、パイロット的にネットワーク分析を試行。

ステップ2) 計量的ネットワーク・データ分析。

ステップ3) 中国でのフィールドワーク：中

国映画産業組織内人員へのインタビュー。

ステップ4) 計量的ネットワーク・データ分析の結果を、当該時期(1979~2013年)における映画政策やマクロ経済指標の変化と照合し、ネットワーク構造の変化・不変化の原因を探る。

4. 研究成果

計量的ネットワーク・データのパイロット分析の結果、経済社会学的アプローチが予測するような、「繰り返し共同」のかたちをとった市場の「社会的構造化」 社会的権力(例えば、国有スタジオに対する政策上の優遇)や過去の取引の惰性的継続のような社会構造の存在 を示唆する結果が得られた。

さらに、インタビュー、文献研究に基づく質的研究の結果、映画産業構造全体に関する以下の知見が得られた。

中国映画と言うと、どのような作品を思い浮かべるだろうか。張芸謀の『紅いコーリャン』(1987年)のような、いわゆる第五世代文化大革命後に映画教育を受け、80年代半ばから新しいスタイルの作品をつぎつぎと発表した監督たち の作品を思い浮かべる者もいるだろうし、90年代以降、市場経済化の加速とともに噴出したさまざまな社会問題(失業・犯罪・若者の政治的無力感など)を扱ったインディペンデント映画監督たちの作品、例えば、張元の『北京バスターズ』(1993年)や賈樟柯の『プラットホーム』(2000年)を挙げる人もいるかも知れない。中国に出張や留学経験のある読者は、中国国内で一番人気があるのは、シリアスなアート映画ではなくて、馮小剛に代表されるようなコメディ映画だと言うだろう。政治や国際関係に関心のある読者であれば、政府の資金援助を得て製作される国策映画、いわゆる「主旋律映画」を思い浮かべるだろう。このジャンルでは、中華人民共和国建国60周年を記念した『建国大業』(2009)、中国共産党創設90周年を記念した『建党偉業』(2011)などが記憶に新しい。このように、非常に多様化する現代中国映画の世界を理解するには、どのような見方をすれば良いのだろうか。

本研究では、先行研究の大部分を占める映画作品そのものの批評・分析ではなく、中国映画生産のマクロな構造がどのような要因に規定されているのか、という社会科学的なアプローチを採用した。

結論から言うと、今日の中国映画の多様性とダイナミズムは、三つの論理のせめぎ合いの中から生まれている。三つの論理とは、政治・経済・芸術である。まず政治的論理を強調する作品群として、前述した主旋律映画が

ある。このジャンルの映画は、中国政府や党の政治的メッセージを反映する政治映画であり、政府から資金的な援助も受けるし、配給や上映に関しても、上映スクリーン数の確保などで大いに優遇される。その多くは、共産党の指導者を描いた伝記映画であり、例えば、『毛沢東の故事』(1992)、『鄧小平、1928』(2004)などがある。歴史的出来事を描いた作品も多く、『大決戦』三部作(1991・1991・1992)は、国共内戦での勝利を称揚する歴史・戦争映画である。

経済的論理を強調する映画としては、馮小剛に代表されるような娯楽・商業映画がある。このジャンルの監督たちに共通する特徴は、その多くが、映画関係の人材育成のエリート教育機関である北京電影学院を卒業していない、ということである。馮小剛は、正式な映画教育を受けたことがなく、もともとは、テレビドラマのディレクターとして頭角を現した。その後、テレビ番組製作でつちかった商業的センスを映画製作に応用し、『夢の請負人』(1997)、『手機』(2003)、『戦場のレクイエム』(2007)、『狙った恋の落とし方 1・2』(2008・2010)、『唐山大地震』(2010)、『一九四二』(2012)と言ったヒットを生み出し続けている。旧暦の正月休みに映画をリリースして興行成績を上げる「賀歳片」(正月映画)ということばができたのも、彼の作品からである。

芸術的論理を強調する映画としては、張芸謀、陳凱歌、田壮壮のような第五世代監督の作品に代表される、いわば「国際派」中国映画がある。「国際派」というのは、国際映画祭で活躍すると言ったほどの意味で、例えば、張芸謀監督の『紅いコーリャン』は1988年ベルリン国際映画祭で金熊賞(最優秀作品賞)、陳凱歌監督の『さらば、わが愛 霸王別姫』(1993)は1993年カンヌ国際映画祭でパルム・ドール(最高賞)、田壮壮監督の『青い罫』は東京国際映画祭でグランプリを、それぞれ受賞している。今でこそ、張芸謀が2008年北京オリンピックの開会式・閉会式の演出に抜擢されたり、陳凱歌が主旋律映画である『建国大業』にゲスト出演したりして、中国政府に「懐柔された」と批判されることも多いが、彼らの初期の作品は、反体制とまではいかなくとも、中国共産党の政策や歴史(例えば文化大革命)を批判的に描く作品が多く、政治の論理を強調する主旋律映画とは対極の論理(「対抗政治」(counter-politics))を志向していたことを確認しておきたい。

芸術的論理を強調するもう一つの作品群として、いわゆるインディペンデント映画がある。低予算で、フィクション映画も多いがドキュメンタリー作品も数多く、国内外にお

いて「映画ファン」をターゲットにするニッチ映画である。前出の国際派中国映画がその初期において展開したような、歴史叙述の中での対抗政治ではなくて、現代の社会問題を描くことによって、より先鋭で同時代的な社会批判を展開する。そのため、映画産業を統括する政府機関である電影局から作品の発禁処分を受けることもある。例えば、王小帥は、『極度寒冷』(1993)を撮影するにあたって、「無名」という匿名を使って製作しなければならなかったのだが、それでもこの作品は発禁処分を受けた。

以上、簡潔に、政治、経済、芸術の三つの論理のせめぎ合いの中から生まれる四つのタイプの映画 主旋律映画、娯楽・商業映画、国際派中国映画と インディペンデント映画 を概観してきた。もちろん、このような大まかな分類には、抜け落ちる部分があって、例えば、前出の『建国大業』は、中華人民共和国建国 60 周年を記念するまさしく政治映画だが、政治的論理の押し付けだけでは、中国の観衆を惹きつけられなくなっていることは、政府も十分承知しており、ジャッキー・チェン、ジェット・リー、チャン・ツイイーと言った香港を含む中華圏の映画スター、さらには陳凱歌、馮小剛などの監督も多数、カメオ出演させて、政治の論理と娯楽・商業的アピールの融合を目指しており、これら映画は、それ以前の主旋律映画と区別して「新・主流映画」と呼ばれることもある。また、第五世代監督の作品はハリウッドや香港・台湾、あるいは日本との合作映画も含めて、より商業化されてきており、対抗政治はもちろん、芸術の論理からも離れて、娯楽・商業映画と変わらなくなってきたという批判も国内外で多い。さらには、以前は、体制外で映画を製作してきたインディペンデント映画監督たちも、国内上映を目指すため、国内の検閲を通す努力をするようになってきている。近年は、ビッグ・データの分析や微波(ウェイボー)といった SNS ユーザーの嗜好を、製作される映画作品のストーリーや俳優のキャスティングに即座に反映させる、郭敬明の『小時代 1・2・3・4』(2013・2013・2014・2015)のような、いわゆる「80後」(1980年代に生まれた若者世代)の監督たちによるメディアミックス作品も大ヒットしており、中国映画産業の発展から目が離せないゆえんである。

<引用文献>

Nakajima, Seio. 2007. *The Chinese Film Industry in the Reform Era: Its Genesis, Structure, and Transformation Since 1978*. Ph.D. Dissertation, Department of

Sociology, University of California, Berkeley.
Nakajima, Seio. 2009. "Film as Cultural Politics." Pp. 159-183 in *Reclaiming Chinese Society: The New Social Activism*, edited by Ching Kwan Lee and You-tien Hsing. London: Routledge.
Zhu, Ying, and Seio Nakajima. "The Evolution of Chinese Film as an Industry." Pp. 17-33 in *Art, Politics, and Commerce in Chinese Cinema*, edited by Ying Zhu and Stanley Rosen. Hong Kong: Hong Kong University Press.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

中嶋 聖雄、2016年7月号、「中国商業映画の新潮流(1)」、『東亜』No. 589(掲載決定)(査読なし)

中嶋 聖雄、2016年4月号、「中国映画と政治」、『東亜』No. 586: 80-81。(査読なし)

Nakajima, Seio. 2016. "The genesis, structure and transformation of the contemporary Chinese cinematic field: Global linkages and national refractions." *Globa Media and Communication* 12(1): 85-108, DOI: 10.1177/1742766515626831 (査読あり)

中嶋 聖雄、2016年1月号、「中国映画の見方」、『東亜』No. 583: 90-91。(査読なし)

[学会発表](計 1 件)

Nakajima, Seio. 2016. "The Genesis, Structure, and Transformation of the Contemporary Chinese Cinematic Field: Global Linkages and National Refractions." *Situating Huallywood: Cinematic Interconnections in the Asia-Pacific*. May 14, 2016. Ningbo, China.

[図書](計 0 件)

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:

番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]
ホームページ等

<https://www.waseda.jp/gsaps/about/faculty/nakajima-seio/>

<https://scholar.google.co.jp/citations?user=uHexyOAAAAAJ&hl=ja>

6. 研究組織 (1)研究代表者

中嶋 聖雄(Nakajima, Seio)
早稲田大学アジア太平洋研究科・准教授

研究者番号: 70734325

(2)研究分担者
()

研究者番号:

(3)連携研究者
()

研究者番号: